

インテリアコーディネーター 誕生の背景



- ・日本住宅の変遷と、インテリアコーディネーター誕生の背景について理解しましょう。
- ・住宅の供給方法、これからの住宅のありかた、住宅にかかわる地球環境問題について学習します。

1 日本住宅の変遷

日本の住宅の中で基本的な様式（**起居様式**・ききょうしき）は、床座であった。また、日本の伝統的な住まいは、内部空間を緩やかに障子や襖などで仕切り、生活に必要な家具や道具が適宜組み込まれ、小型の家具や調度品をしつらえていた。

📖HB 上 p3 / 図 空間の起居様式

(1) 明治時代後期～

都市部を中心に家族で食卓を囲む習慣が生まれるとともに**卓袱台**（ちゃぶだい）が普及しはじめた。食後は卓袱台を片付け茶の間は寝室に使われることが一般的であった。

卓袱台の普及は、都市部中産階級の家が、上下関係を伴わない一家団欒の食事をするようになったことを物語っている。

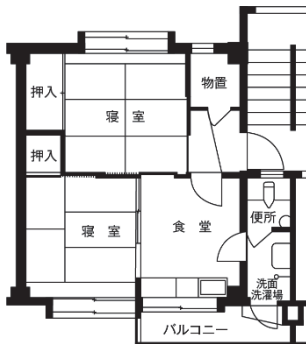
(2) 1950 年代～

日本において住宅の大量供給は、高度経済成長期の 1950 年代に始まった。

この時期に日本の住宅は欧米の住宅の影響を受け、**公室と私室の分離、食寝分離**など新しい間取りの理念が生まれた。1951 年にはその理念のもとに、**ダイニングキッチン（DK）**を取り入れた **DK 型間取り住宅・51C 型**（公営住宅標準プラン・1951 年）が実現した。それにはキッチン設備の改善が大きな役割を果たし、これがインテリアエレメント第一号ともいえる。

これを契機に、日本の起居様式は床座から椅子座へと大きく変化し、**n（個室数）+LDK**という間取りが生まれる。

食寝分離



食寝分離

食事する空間と寝室を別に設けることを住宅の最低レベルとする考え方。1942 年建築学者の西山卯三（にしやまうぞう）により提唱され、戦後の DK 住宅などで具現化された。

(3) 1960 年代～

良質な住宅の大量供給を目的に、**工業化住宅**が誕生した。

プレハブ住宅と呼ばれるものもそのひとつである。

また、工業化により、営業、設計、生産、施工を一貫して行う組織である**ハウスメーカー**が誕生した。

工業化住宅

住宅のつくり方は、その時代の社会や生活文化を背景に、様々な要求に応えられる技術開発が重視されてきた。

工業化住宅は、木材加工をはじめ全てを建築現場で行う従来の方法とは異なり、工場で建築部材を生産しそれらを現場で組み上げて住宅を建てる方式で、標準化や規格化を前提に、良質で均質な住宅を大量に供給する場合に適している。

(4) 1970 年代～

今日では当たり前のように使われている**インテリア**という言葉だが、日本では 1970 年頃、文部科学省が工業高校の教育課程に「インテリア科」を設置したのが始まりである。インテリアとは本来建築物の内部空間を意味する。

建築物は住宅に限らず公共建築、商業建築、事務所建築、学校建築、病院建築などをさす。これらのインテリアをデザインする専門職能者は 1970 年以前から存在し、室内装飾家や室内設計家という名称で呼ばれていたが、一般の住宅には縁のない職能であった。

(5) 1980 年代～

住宅空間を自分独自のものにしたいという要望をインテリアによって達成できる可能性が生まれたことにより、インテリアエレメント・部品メーカー、その販売業者、インテリア部分の工事を請け負う専門業者などが新しい産業として生まれた。これが、その後の「**インテリア産業協会**」の設立に繋がる。

1984 年にインテリアコーディネーター資格制度がスタート。

当時のインテリアコーディネーターの定義は「インテリアエレメントの流通過程において、消費者に対し、商品選択とインテリアの総合的構成等について、適切な助言と提案を行う人」であり、その基本は現在も変わっていない。



起居様式 | 卓袱台 | 公室と私室の分離 | 食寝分離 | DK 型間取り | LDK 型間取り | 工業化住宅 | プレハブ住宅 | ハウスメーカー | インテリア産業協会

2 住宅の供給方法

住宅の供給方法は大きく二つに分かれる。

一つは住まい手が決まっていて、要望に沿って建設される**注文住宅**。もう一つは計画時には住まい手が未定で、建設されたものを見て購入する**建売型住宅**で、分譲住宅（マンション含む）、賃貸住宅などがある。

(1) 注文住宅

住まい手が決まっている住宅。注文住宅は一品生産なので手間も掛かりコストも高くつくが、住まい手の満足度は高い。しかし、住まい手の好みが極端に表現された住宅は、転用が難しく中古流通には適さないという側面もある。

(2) 建売型住宅

計画時には住まい手が決まっていない住宅。建売型住宅は計画から建設まで供給側の意図で進めることができるため、大量供給には適しているが多様なライフスタイルを持つ住まい手にどれだけ適応し満足してもらえるかという課題が残る。

3 これからの住宅

(1) サステナブル社会

東日本大震災を経て、大規模な自然災害への新たな対応や、超高齢社会における安全で健康な生活環境を確保し、提供していくことにも専門性を生かすことがインテリアコーディネーターに求められている。

地球環境が人々の生活と無縁ではなく、**サステナブル社会**を目指し、生活者と向き合いながら、環境意識に働きかける役割も期待されている。

サステナブル

地球環境用語。持続可能性または持続可能であること。環境分野で主に用いられ、現在の環境下で人間が生活を続けられることをいう。

(2) 長期優良住宅

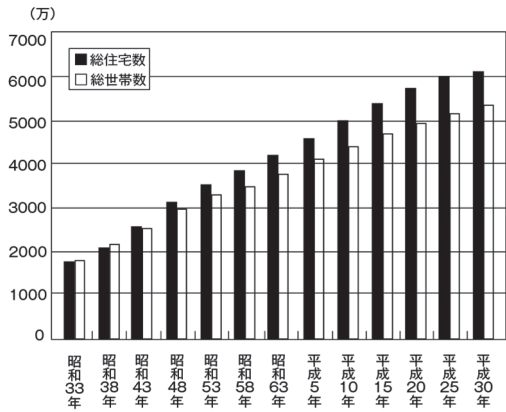
平成 21 年から始まった「**長期優良住宅認定制度**」では、耐震性や省エネルギー性などとともに、共同住宅におけるインテリアの**可変性**が設定されている。

住宅ストック活用時代を迎え、インテリア空間に手を加え、使い易く性能を高め、長く使い続けられるようリニューアルすることは社会的にも意義がある。国土交通省は、一定の耐震性と省エネ性能を有する住宅への建て替えに対して、国がその費用の一部について支援する「住宅ストック循環支援事業」を平成 28 年にスタートさせている。

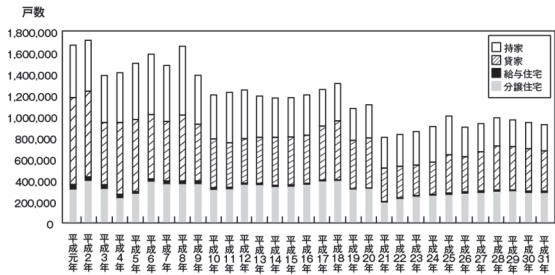
(3) 空き家の増加率

日本では 1973 年に全ての都道府県で総住宅数が総世帯数を上回り、**一世帯一住宅**が達成された。これにより、住宅の量の充実は達成され、質の向上を目的とした住宅政策がとられることになる。2018 年の住宅・土地統計調査では、総住宅数と総世帯数の差は広がり続け、空き家率の増加が注目されている。また、管理が不十分な空き家について対策を講じ、空き家やその跡地を有効活用するよう求めた「空家等対策の推進に関する特別措置法」が施行されている。

総住宅数と総世帯数の推移



新設住宅着工戸数の推移



4 住宅にかかわる地球環境問題

生活が快適になる一方で、近年、地球温暖化やごみ問題が発生している。

深刻化した環境問題を解決するために、日本でも様々な取り組みが推進されている。環境に優しい提案ができるように、インテリアコーディネーターも住宅・インテリアに関わる取り組みや製品について理解を深めることが大切である。

(1) 3R（スリーアール）

「循環型社会形成推進基本法」で導入された、エコライフ、**循環型社会**実現のためのキーワード。3RのRとは、ごみの発生を減らす**リデュース**（Reduce）、ごみの再利用を意味する**リユース**（Reuse）、資源としてごみを再利用する**リサイクル**（Recycle）の三つの行動のこと。

(2) CASBEE（キャスビー）

住宅の省エネルギー性を評価する基準の一つ。

正式名称「建築環境総合性能評価システム」という。

音環境、光環境などの「建築物の環境品質」と、省エネルギーや資源の循環、敷地外環境への配慮など「建築物の環境負荷低減性」の大きく二つの項目から「建築物の環境性能効率（BEE）」を導き出し、評価を行う。

(3) 建築物省エネ法

建築物の省エネ性能の向上を図るための法律（正式名称は「建築物のエネルギー消費性能の向上に関する法律」）。2017年より同法に基づく手続が必要となり、従来の「省エネ法」に基づく届け出は廃止されている。

(4) 建設リサイクル法

建設工事において、再生資源の十分な利用と廃棄物の減量を目的とした法律（正式名称は「建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律」）。

企画から生産、利用、廃棄・リサイクルに至る製品の全ライフサイクルに対して、環境に配慮した考え方をライフサイクルデザインという。

インテリアコーディネーターは、住まう人のライフスタイルをデザインしながらも、地球環境問題に積極的に取り組んでいく姿勢が求められる。



注文住宅 | 建売型住宅 | サステイナブル社会 | 長期優良住宅 | 住宅ストック
| 可変住宅 | 3R | 循環型社会 | CASBEE | 建築物省エネ法 | 建設リサイクル
法

過去問にチャレンジしよう

- (1) 明治時代後期から、都心部を中心に家族で食卓を囲む習慣が生まれるとともに（ ）が普及しはじめた。(2020. 1. ア)
1. 折敷（おしき） 2. 箱膳 3. 卓袱台（ちゃぶだい）
- (2) 第二次世界大戦後には（ ）の理念のもと、DK 型の間取りの公営住宅標準プラン 51C 型の供給が始まった。(2020. 1. イ)
1. 標準化 2. 和洋折衷 3. 食寝分離
- (3) 地球環境が人々の生活と無縁ではなく、（ ）社会を目指し、生活者と向き合いながら、環境意識に働きかける役割も期待されている。(2016. 2. ア)
1. グローバル 2. サステイナブル 3. バリアフリー

(答) (1) 3 (2) 3 (3) 2